

大垣との汽船運航

西羽 晃

江戸時代には元禄2（1689）年に俳人・松尾芭蕉が大垣から長島へ舟で下っており、桑名と揖斐川上流とは船による往来した文人の紀行文は多く残されている。当時は手漕ぎの帆船であったが明治には汽船が登場する。

明治9（1876）年には泰平丸（66人乗）と発明丸（40人乗）が就航し、桑名―大垣間は約11時間もかかったといわる。大垣に入る水門川は水深が浅いため困難なことが多く、しばしば中止や廃止になった。同15年7月から新造の両国丸が就航したが、やはり水深が浅いため舟が傷んだ。同15年11月に大垣で濃勢講社が設立され、大垣の人々に混じり、桑名の坂井孫六・水谷方右衛門も参加している。この講社は同16年3月から大垣桑名間の汽船を運航している。同17年5月から第六運輸丸を就航させている。



桑名・大垣間の汽船（『三重県地誌』（1890年）より

香取の伊東常三郎は大垣へ船でしばしば行っているが、同17年12月7日上之郷から夜船に乗り、翌朝に大垣に着き、大垣で用事を済ませて、午後には大垣から上之郷に船で戻っている。彼は桑名へ出るのに、和船をチャーターしているので、大垣行は定期的な汽船でなく、チャーターした和船であったかもし

れない。

東海道鉄道の大垣駅が開業したのは明治 17 年 5 月だったが、東京と神戸間が全通したのは同 22 年 7 月 1 日だった。桑名には鉄道がない時代なので、桑名から船で大垣に行き、そこから鉄道で東京や京都・大阪へ行くことができた。そのため桑名一大垣間には同年 4 月から新しく阿波丸・三岐丸が就航した。

桑名一大垣間の船は各地に寄港している。明治 24 年 7 月 30 日、伊東常三郎は東福永から夜船に乗って大垣へ行き、大垣から京都へ鉄道に乗っている。運航会社も変わっているようだが、同 27 年 2 月に共進組が組織され、3 月から 1 日 2 往復している。同年 8 月 24 日から 1 日に 4 往復になっている。桑名発は午前 6 時、9 時、午後 1 時、4 時 30 分で、寄港地は沢崎、今島、油島、大田、山崎、高須、根古地、福東、水門で、6 時間 40 分で大垣に着いている。大垣発の便は所要時間が 5 時間 25 分で、川を下るので早い。

大正 8 (1919) 年に桑名一大垣間が養老鉄道で結ばれた。運賃は船は 50 銭だったが、鉄道は 2 等 1 円 13 銭、3 等 74 銭で高いが、所要時間は 1 時間 45 分、1 日 7 往復と便利だったので、船は次第に寂れた



大垣の船町港跡